スマートミュージアム
Kakamigahara

平成 30 年度 企画展

幕末の各務原

明治150年
MEIJI150th

尊王　攘夷　開国　倒幕　佐幕　　新政府

展示解説

会　期　平成 30 年 11 月 17 日（土）～ 12 月 16 日（日）
10 時～ 17 時　休館日 11 月 19 日・26 日・27 日　12 月 3 日・10 日

会　場　各務原市立中央図書館 3 階　展示室 A

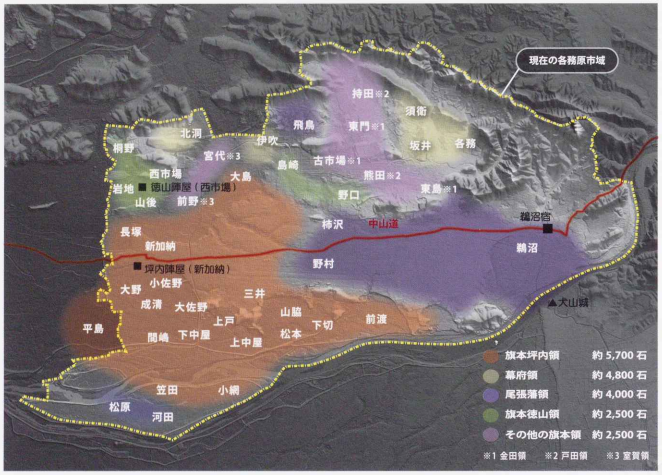
主　催　各務原市教育委員会

幕末 各務原市 幕末マイスター

新選組ららら

表紙背景 / 各務野八ヶ村入会地焙烙放場所絵図（岐阜県歴史資料館蔵）

幕末の各務原



▲ 各務原市域の領地分布（地形図は現在）

各務原は、木曽川の水運、中山道という主要道が通る、交通の要衝でした。そのため幕府領も多く、徳川御三家である尾張藩、幕府直属の家臣である旗本が治めていました。旗本坪内氏と徳山氏は、それぞれ中山道に近い西市場村と新加納村に陣屋を置き、当地を治めました。

◀ 鵜沼宿の脇本陣（復元）

宿泊・休憩施設として、身分の高い人が使用する本陣（桜井家）、脇本陣（野口家）の他、多くの旅籠が並んでいました。

■ 坪内陣屋（新加納）

坪内陣屋の表門（上宮寺）

坪内陣屋跡発掘調査（H22）

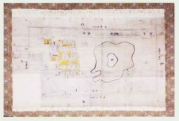
陣屋とは、城を持たない旗本の屋敷のことです。

旗本坪内氏宗家の陣屋は、旧中山道の立場（宿場間に設けられた休憩所）があり、間の宿にもなった新加納にあります。地形的にみると、各務原台地の西端に位置します。

近年の発掘調査により、その面積はおよそ 10,500 ㎡で、屋敷の周囲は幅 5m、深さ 3mという巨大な壕と土塁で囲まれていたことがわかりました。街道沿いの「城」のような軍事的性格を持っていたということになります。また、表門は岐阜市前一色の上宮寺に移築され、現存しています。

■ 徳山更木陣屋（西市場）

徳山更木陣屋跡発掘調査（H12）

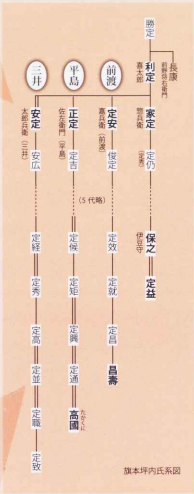


徳山更木陣屋絵図

旗本徳山氏の陣屋は、各務郡西市場・山後・大島・島崎・野口・熊田の村々を治めていました。「更木陣屋」の名は、那加地区西部が中世以降「更木」と呼ばれていたことに由来します。詳細な絵図が残され、屋敷内部の様子を細かく知ることができます。

敷地内には広大な庭と池があり、「使者の間」や「書院」のある一方、使用人や女中たちの部屋もあるなど、公務と生活の両方に使われていたことがわかります。また、肥前産の良質な陶磁器類や、家紋入りの壁掛け花瓶なども出土しており、徳山氏の当地での暮らしぶりが伺えます。

旗本坪内氏と徳山氏



坪内嘉兵衛昌寿（かへえ まさひさ）
(1835 ～ 1911)

前渡坪内氏 11 代目当主。前渡坪内氏の直参（じきさん）旗本としての家格を取り戻すため、各務野での大砲稽古などで幕府に積極的なアピールを行った。しかし、戊辰戦争の際には幕府に見切りをつけ、いち早く新政府軍に参加した。

（岐阜県歴史資料館画像提供）

徳山五兵衛秀堅（こへえ ひでかた）(1836 ～ 1870)

徳山氏 12 代目当主。文久 3 年（1863）、28 歳で歩兵指図役頭取（とうどり）になり、歩兵頭並、歩兵頭、歩兵奉行と出世し、フランス式軍備を整えた幕府軍の指揮官の一人となる。慶応四年正月、徳川慶喜の入京の際には、二条城の守備についた。

坪内氏は、総石高 6,800 石の旗本です。坪内利定（としさだ）(1539 ～ 1610) は織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕え、関ケ原の戦いでは鉄砲隊を率いて活躍し、親子兄弟五人連名の知行宛行状（ちぎょうあてがいじょう）を獲得しました。

しかし江戸時代中期以降、前渡（まえど）・平島（へいじま）・三井（みい）の三家は分家扱いされ、将軍にお目通りすることができなくなってしまったことで、家格をめぐって宗家としばしば対立しています。幕末の宗家の当主、坪内保之（やすゆき）(1811 ～ 1876) は、将軍に近侍して将軍と役人との取次を行う「御側御用取次（おそばごようとりつぎ）」という重役に就くほどの人物でした。

一方、徳山氏は、総石高 2,700 石の旗本です。美濃国大野郡徳山谷を支配していた土豪（ごう）の一族で、徳山五兵衛則秀（こへえ のりひで）（秀現（ひであき）、1544 ～ 1606）は柴田勝家・前田利家・徳川家康に仕えました。江戸時代は代々大坂城普請奉行（ふしんぶぎょう）・大坂町奉行・勘定奉行などを務めています。特に幕末の 12 代秀堅は、フランス式軍制を採用した幕府軍の指揮官である「歩兵奉行」に任命されるなど、幕府の重役を務める旗本でした。

新加納宗家　5,000 石
利定（父）及び家定（長男）

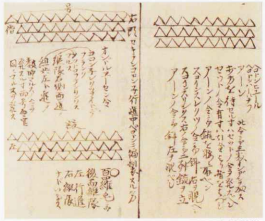
前渡　600 石
定安（次男）

平島　600 石
正定（三男）

三井　600 石
安定（四男）

◀ 陣笠

前渡坪内氏の家来である永井家に伝わる平陣笠です。坪内氏の家紋「丸の内洲浜紋（すはまもん）」が入っています。平陣笠は、身分の低い武士たちの標準装備でした。



（徳山松家文書　岐阜県歴史資料館蔵）

「教練号令笠（きょうれんごうれいがさ）」▶

徳山秀堅は、フランスの軍制を取り入れた幕府軍の指揮官でした。そのため、フランス語での号令がカタカナで記された覚書が残されています。

異国船の接近

江戸時代後期以降、いわゆる「鎖国」下にあった日本の近海にも、各国から漂流して保護を求める船や、ロシア船を中心に通商を求める船が多数姿を見せるようになっていました。内陸にある各務原においてもこれらの事件は伝えられ、外国の情勢や幕府の対応についてかなり詳しい情報がもたらされていました。また、嘉永6年(1853)のペリー来航によって、内陸の各務原の村々でも、品川のお台場建設費用を負担するための増税が行われるなど、人々の生活に影響を及ぼし始めました。

亜米利加船　副将アダムス絵
（江馬寿美子家文書　岐阜県歴史資料館蔵）

開国を要求する交渉を幕府役人相手に行った、ペリーを補佐する参謀長。黒船・外国人は当時の人々にとって非常に大きな関心事で、絵図や瓦版などが伝わっている。

◀「聞書集」　鵜沼宿本陣桜井家文書

鵜沼宿本陣の桜井家が、享和3年(1803)～弘化4年(1847)の間の、国内の情勢について記した文書です。全23件。何らかの意図があってまとめられたものではなく、宿場同士のつながりや宿泊者との会話によって知りえた情報を記録したものです。

その中には、異国船に関する事柄も、下表のように記録されています。

文化2年5月	1805	ロシア船が長崎に来航、遣日使節レザノフが幕府に貿易を求めるも拒否したこと
文化4年1月	1807	長崎で交易している中国船が下総国銚子に漂着し、米・薪・水を支給したこと
文化4年3月	1807	異国船の来航に備えるため、西蝦夷地を幕府が直轄地にすること
文化4年4月	1807	択捉島にロシア船二隻が着岸し、番所や蔵が襲撃されたこと
文化4年	1807	蝦夷地の警備役の任命やロシア船来航への対応のこと
文化10年	1813	オランダ船から献上された品物のこと

◀「前渡坪内氏御用部屋記録」
安政2年(1855)　富樫家文書

前渡坪内氏の御用部屋（政務を執り行うところ）の記録です。異国船が渡来していることについて、万が一江戸で非常事態が起こった場合、鉄砲を持って参上する旨を伝えています。異国船に対する緊張感と、前渡坪内氏の高い士気が感じられる文書です。

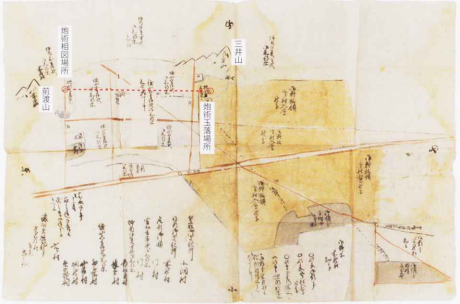
異国舟渡来二付、万一非常之節、江戸表ヲ御出張も御座候節、鉄砲御持参致候、前以来海道筋御関所御差支無之様、御本家様ヘ向御届ケ左二御届申上候鉄炮之覚

一　百目筒　一挺
一　同短筒　一挺
一　八拾目筒　一挺
一　拾文目筒　一挺
一　六文目筒　一挺
一　三文目五分二ツ鳴筒　一挺
一　三文目五分筒　四挺

各務野の大砲御稽古場

各務原台地は、江戸時代には各務野と呼ばれていました。各務野は、川が少なく用水を得ることが難しいうえ、強い酸性土壌（黒ボク）に覆われており、農業には不向きでした。そのため、農村がほとんどなく、広大な原野が広がっていました。このような土地環境の各務野は、大砲の玉を放つのに都合の良い場所でした。

幕末の各務野は、江戸近海への異国船接近によって、軍事上の重要度が増していきます。前渡坪内氏は、幕末の動乱に乗じて幕府に自分たちの大砲の技術をアピールすることで、立身出世をする好機だと考えていたようです。嘉永3年(1850)には幕府役人に砲術稽古の実施を申し出たり、慶応2年(1866)には家臣を引き連れ江戸へ行き、大砲の技術などを幕閣に披露しています。



▲ 各務野八ヶ村入会地炮術放場所絵図（横山恒雄家文書　岐阜県歴史資料館蔵）

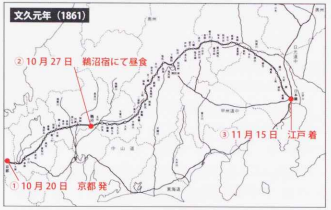
嘉永4年(1851)11月、前渡坪内氏が実施した大砲訓練の様子を、前野村の庄屋である横山忠兵衛が幕府の役所に絵地図にして報告したものです。絵図には、大砲が前渡村から三井山の北側の「炮術玉落場所」まで25丁(約2,700m)飛んだと報告しています。

和宮の降嫁

幕末には、朝廷の伝統的権威を幕府と結びつけて、幕藩体制を強化しようとする「公武合体政策」が行われました。文久元年(1861)孝明天皇の妹である和宮が、14代将軍徳川家茂に嫁いだことは、その象徴的な出来事です。

当時の主要道であった東海道は、海沿いを通るため大きな川が多く、川を渡る際の事故や川止めが心配されていました。そのため、多くの女性たちも同行する姫君の通行に際しては、中山道を使用することが多かったようです。

中山道を通行する和宮一行は、27日間かけて京都から江戸まで進みます。京方、江戸方、随行警護の十二藩、その他人足など総勢8万人といわれる大行列で、加納宿（現岐阜市）・鵜沼宿では荷物持ちの人足を1万6,000人、荷馬を1,000匹用意しました。行程の8日目にあたる10月27日、加納宿に泊まり、新加納の梅村屋という茶屋で小休憩した後、鵜沼宿で昼食をとりました。



和宮　中山道通行経路

◀「御買物書上帳」　鵜沼宿本陣桜井家文書

和宮の通行に際して、集めなければならない調度品や食材の買物一覧です。

鯛、鰤、かぶら、漬松茸、水菜、大根、なめ茸、えのき、小梅、小鰤、いな、蛤、椎茸、黒ごま、キジハタ、ゆず、牛蒡、銀杏、山の芋、奈良漬、沢庵、赤みそ、鰹節、かます、魚串、小豆、上溜り（醤油）、砂糖、塩　など

和宮（1846～1877）　（德川記念財団蔵）

仁孝天皇の皇女、孝明天皇の妹。文久元年(1861)公武合体政策のため、16歳で14代将軍徳川家茂に嫁いだ。

■ 和宮の鵜沼宿での昼食

大津宿の仲買商人西村家の文書で、和宮の宿場町での食事の献立を記録しています。

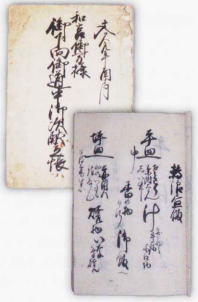
献立を見ると、一汁四菜ですが、お姫様の昼食というには質素な印象をうけます。また、さより、いな（ボラの稚魚）等、海魚が多く使われていることも特徴です。河川を活用した物流が確立されていたことがうかがえます。

和宮のために集められた食材の中でも、使われたものと使われていないものがあります。和宮の一行には、お抱えの料理人がついていました。鵜沼宿が食材を集め、その中から、料理人がより良い食材を選んで使ったのでしょう。

また、漬物は他の宿場でも毎日、「茄子の奈良漬け」と「たくあん」でした。和宮の好物だったのでしょうか。

▲ 和宮 昼食再現料理　料理教室講師の大森久仁子氏監修のもと、鵜沼宿ボランティアガイドの方々と料理し、再現しました。

鵜沼昼飯
平皿　さより　葉附大こん　志い竹
汁　香の物　赤ミそ　牛房小口切
香の物　同断（なら漬なす　沢庵大根）　御飯
坪皿　赤貝　山のいも　銀なん　薄造生か
焼物　いな付焼



▲「和宮御方様御下向御道中御次献立帳」（西村幹夫氏蔵）

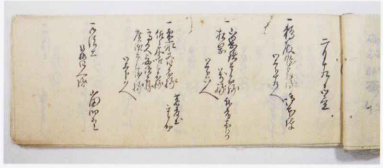
浪士たちの通行

浪士組

浪士組とは、幕末に幕府が浪人を集めて作った組織です。文久 3 年(1863) の将軍徳川家茂の上洛前に、浪士を京都に送り込み、過激な尊王攘夷の考え方を持った人々を取り締まることを目的としていました。

浪士組には、のちに新選組の中核となる近藤勇・土方歳三・山南敬助・沖田総司などがいました。また、彼らを監督する浪士取締役には、幕臣の鵜殿鳩翁・山岡鉄太郎（鉄舟）などがついていました。

234 名で江戸を出発した浪士組は中山道を通って京に向かい、同年 2 月 19 日、鵜沼宿で昼食をとりました。

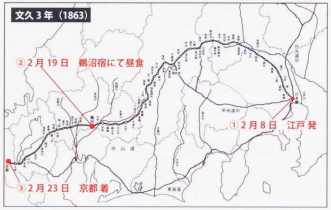


二月十九日御昼
一 鵜殿鳩翁様　御本陣
御上下十九人
一 山岡鉄太郎様
松岡　万様　武藤嘉左
衛門
御上下六人
一 速水又四郎様　茗荷屋
佐々木唯三郎様　重助
高久安次郎様
広瀬六兵衛様
御上下八人
一 御浪士　山田臣吾
弐拾四人様

▲「御雇い人馬書上等綴り」　文久 3 年 (1863)　鵜沼宿本陣桜井家文書

宿割帳の控えです。浪士組を率いる浪士取締役の面々の名前と浪士組の人数、昼食をとる旅籠の割り当てについて記載されています。

予約なのでまめにとってあるのか、13 軒、280 人での申請です。



浪士組　中山道通行経路

近藤勇 (1834 ～ 1868)
（佐藤彦五郎資料館画像提供）

武蔵国の農民の生まれ、後の新選組局長。幕府の浪士組の募集に応じ、中山道を通行の際は先番宿割として宿場町の予約にあたった。

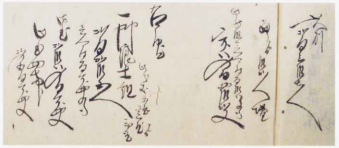
山岡鉄太郎 (鉄舟) (1836 ～ 1888)
（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より転載）

幕臣・剣客。26 歳の時に浪士組の取締役となり、中山道を通行した。後に徳川慶喜警備のための精鋭隊頭等を歴任、江戸無血開城にも貢献した。

■ 浪士組の未払い分？

割渡帳には、浪士組が本陣にまとめて支払った代金を旅籠に分配する際のお金のやりとりが記載されています。

結果的に 225 人分の料金が浪士組から支払われましたが、実際に昼食をとったのは 237 人なので、未払い分が発生しています。



人別
〆弐百三拾七人
当りより拾弐人増し
此分但三人二付百拾八文ツヽ
〆廿八貫百四拾弐文
右之内江
此分丈　新屋
定蔵より
市蔵
一御浪士組
弐百弐拾五人
壱人二付百廿四文ツヽ
此■弐拾八貫百廿四文
此■四両ト
弐貫五百廿四文

▲「御上洛御供立　御浪士人別旅ご割渡帳」　文久 3 年 (1863)
鵜沼宿本陣桜井家文書

― 鵜沼宿の利用法 ―

中山道は日々たくさんの人々が通ります。大人数での休憩・宿泊には当然予約が必要です。浪士組ももちろん、鵜沼宿を予約して、料金を支払っています。

■ 宿場町の予約の仕組み

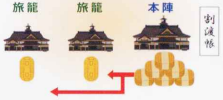
・宿割役人＝旅行の幹事
・本　陣　＝ホテルの支配人　と考えてみます。

①宿割役人が行列に先行して宿場町を訪問し、予約を希望する。人数や名前を本陣に伝える。

②本陣が空き状況を確認し、予約が成立する。宿割帳を作成し、宿割役人に手渡す。本陣は控えを保管する。

③行列が到着。行列の人々は宿割帳で割り振られた場所に休憩・宿泊する。

④料金を本陣がまとめて受け取り、後日、旅籠にお金を分配する。証拠として「割渡帳」を記録する。



■ 宿割役人は近藤勇

浪士組一行の宿割役人は、のちに新選組局長となる近藤勇が務めていました。直接記録には残っていませんが、鵜沼宿の予約も近藤が行ったと考えられます。

しかし、慣れない大人数での旅で、失敗も多かったようです。武蔵国本庄宿で近藤は、芹沢鴨の宿を取り忘れてしまいました。その結果、怒った芹沢が路上で大きな篝火を焚き、近藤が謝罪する、という事件が起こっています。鵜沼宿での昼食代も 12 人分の料金が未払いになっているのは、わざとごまかしたのではなく、人数を間違えてしまったからだと思いたいところです。

浪士組の献立はわかっていませんが、近い時代の脇本陣では「塩鯖の切り身、筍とふきの玉子とじ、もずくの味噌汁」といった献立が記録されています。

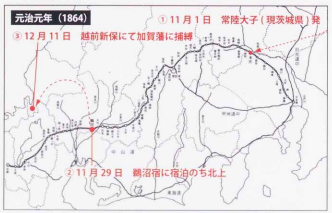
天狗党

天狗党とは、水戸藩の尊王攘夷派の集団です。「天狗」とは、徳川斉昭が藩政改革を行った際、改革反対派が身分の低い改革派を「天狗になっている」と揶揄したことから付けられた名前です。

水戸藩では、政治的な考えの違いから様々な派閥が闘争を繰り広げていました。中でも天狗党は、過激な尊王攘夷で、武田耕雲斎を首領に挙兵しました。彼らは京都にいる一橋慶喜に尊王の志を訴えるため、1,000 人余りの軍勢となって、中山道を西進しました。

鵜沼宿の人々は抜刀した騎馬隊を先頭にした天狗党の様子を見て、「天狗が来る」と恐れて逃げ隠れました。しかし、天狗党は厳しい軍律を定めており、鵜沼宿で悪行はありませんでした。

彼らは鵜沼宿本陣桜井家で会議を開き、西方の加納藩・大垣藩が街道を塞いでいるという情報をうけ、蘇原の坂井村・大島村を抜けて北上し、北陸へ逃れていく道順をとりました。

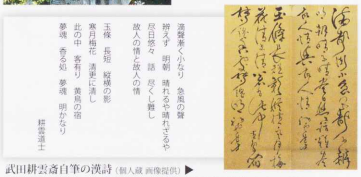


天狗党　中山道通行経路

最終的に越前の敦賀近辺の村で追討の軍勢に取り囲まれ、天狗党は降伏、処断されました。

武田耕雲斎 (1804 ～ 1865)

幕末の尊王攘夷派の水戸藩士。藩内の政争に敗れ、天狗党の総大将として京へ向かうが失敗し、敦賀で処刑された。



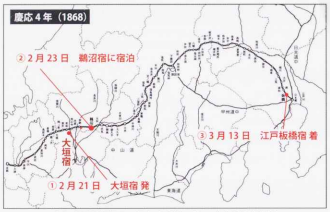
武田耕雲斎自筆の漢詩（個人蔵 画像提供）▶
鵜沼宿本陣桜井家に宿泊した武田耕雲斎が書き残したものです。

戊辰戦争

戊辰戦争は、慶応 4 年 (1868)、薩摩・長州・土佐を中心とした新政府軍と旧幕府軍の間で行われた戦いです。1 月 3 日の鳥羽伏見の戦いに勝利した新政府は、東海道・東山道・北陸道・山陰道・九州・中国四国へ「鎮撫総督府」の軍勢を派遣し、全国の鎮定を始めました。

戊辰戦争の際、旗本たちの目標は、自らのもともとの領地を維持すること、すなわち「本領安堵」でした。しかし、幕臣である旗本にとってそれは困難な道でした。

中山道には総督岩倉具定（具視の子）・参謀板垣退助率いる東山道鎮撫総督軍が進軍しており、2 月 1 日に大垣に到着しました。旗本たちのほとんどが江戸にいるか旧幕府軍として戦っている中、分家扱いゆえ領地にいた前渡・平島・三井の坪内氏は、いち早く東山道鎮撫総督のもとに駆けつけ味方しました。逆に江戸にいた坪内宗家の保之は対応が遅れ、一時的に領地を召し上げられました。また徳山秀堅は、幕府の歩兵奉行として歩兵二大隊を率いて京都の二条城の守備を任されていましたが、「過半打死」と記録されるほどの損害をうけています。



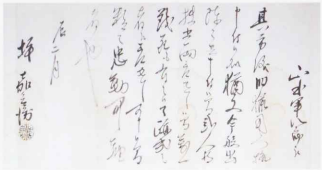
東山道鎮撫総督軍　坪内嘉兵衛一行の中山道通行経路
（「戊辰戦争軍中日記」による）

永井弘衛 (1829 ～ 1900)

永井家は前渡村北島の有力百姓で、野村地域全域を保有した。代々前渡坪内氏の家臣を務めており、弘衛は慶応 2 年の江戸出府や、慶応 4 年の戊辰戦争にも従軍した。

▼ 出陣二付申渡　慶応 4 年 (1868)2 月　富樫家文書

坪内昌壽から家臣の山本軍八郎への手紙です。戊辰戦争に出兵が決まり、随行する軍八郎も「萬一戦死も有之候」という覚悟で、残していく家族のことをきちんとしておくように伝えています。



山本軍八郎江
其方儀助勤用人格
申付候処猶又今般出
陣之共申付候間弐人持
扶出両差遣候間萬一
戦死も有之候て跡式之
者江差遣候可申候間
精々忠勤可勤
者也
辰二月
坪　嘉兵衛

◀ 戊辰戦争軍中日記
慶応 4 年 (1868)2 月　永井家文書

永井弘衛が記した、東山道鎮撫総督軍での従軍日記です。2 月 18 日に坪内昌壽が前渡村から大垣にむけて出発する記事から始まり、人々との交流や戦闘の被害情報、陣中の合言葉などが記録されています。

▲ 平島坪内氏知行安堵状　明治元年 (1868) 9 月　平島坪内家文書

平島坪内氏の金三郎高国が与えられた知行安堵状です。太政官印が押されています。速やかに新政府に従ったことで安堵されたもので、前渡坪内氏も同様のものを受け取っています。

■ その後の坪内氏と徳山氏

▲ 晩年の坪内昌壽

東山道鎮撫総督軍に従軍して活躍した前渡坪内氏の坪内昌壽は、明治 2 年に家族とともに京都へ移住し、新政府の役人になりました。京都御所御玄関詰・京都府勧業課商工係などを務めますが、薩長が要職を占める時代で出世には至らず、明治 18 年 (1885) 前渡村に帰ってきて余生を送りました。

幕府の歩兵奉行として戊辰戦争を戦った徳山秀堅は、明治新政府によって領地を没収され、駿府に身を寄せました。しかし、収入もなくなり、生活苦のため、明治 2 年 (1869) 正月、秀堅の家族は西市場村で帰農することになりました。明治 3 年 (1870)、病気のため、35 歳でその短い生涯を終えました。

◀ 御進発御列書　永井家文書

東山道鎮撫総督軍が 2 月 21 日に大垣を出発した時の隊列順です。先鋒隊は長州藩や土佐藩の軍勢でしたが、そのすぐ後ろに坪内嘉兵衛昌壽とその家臣たちが名を連ねます。自慢の大砲も携行しており、東山道鎮撫総督らの坪内氏への期待が見てとれる布陣といえます。

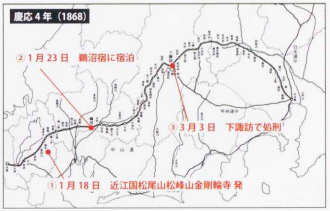
東山道鎮撫総督軍		旗本坪内氏・徳山氏	
1 月 3 日	鳥羽伏見の戦い。戊辰戦争始まる。	1 月 3 日	徳山秀堅は二条城の守備を行い、その軍勢は「過半打死」。
1 月 9 日	太政官は岩倉具視の子、具定を東山道鎮撫総督に任命。参謀は板垣退助。		
1 月 10 日	太政官、徳川慶喜追討の命令。		
1 月 20 日	赤報隊、岩手（垂井町）の旗本竹中重固の陣屋を襲撃。		
		1 月 25 日	前渡・平島両坪内氏、尾張藩に対して嘆願書を提出。 内容は、家元坪内宗家を離れ勤王に励みたいため、尾張藩指揮下に入る旨。
2 月 1 日	総督の一隊、大垣に着陣。		
2 月 4 日	尾張藩に美濃在住の旧旗本を管理させる。	2 月 4 日	徳山氏の家臣林栄門、「主人は行方不明だが、説得して朝廷に味方させる」という誓書を東山道鎮撫総督に提出するが、却下される。
2 月 6 日	「東山道先鋒総督府」に改称。		
		2 月 9 日	前渡坪内氏の昌壽・平島の高国、大垣に出向いて参陣の意向を示す。
2 月 12 日	有栖川宮熾仁親王が東征大総督となる。 東山道軍はその指揮下に入る。	2 月 12 日	坪内昌壽の家臣山本軍八郎、大垣へ呼び出され、坪内昌壽は「御旗本個警衛」をするようにと命ぜられる。
		2 月 14 日	坪内保之の領地は尾張藩が接収、前渡・平島の土地については安堵することの決定。
		2 月 16 日	坪内宗家の家来、江戸の主君の命により勤王に励むと通達。 坪内保之は隠居し、子の定益が名古屋へ向かう。
		2 月 18 日	坪内昌壽、大垣へ向けて出発。新加納にて休息、夕方大垣着。 （三井坪内氏当主定致は 15 歳であったが、東山道鎮撫総督に単独で参加）
2 月 21 日	大垣を出発。		
2 月 23 日	鵜沼を通過。		
		3 月 9 日	宗家定益、江戸より鵜沼に来る。12 日に名古屋へ出府。
3 月 13 日	板橋宿到着。	4 月 7 日	宗家定益、新加納陣屋に入り 50 日間謹慎。
		5 月 9 日	坪内昌壽、坪内高国に本領安堵が認められる。
		11 月	宗家、三井坪内氏とともに本領安堵。

▲ 戊辰戦争における東山道鎮撫総督軍と旗本坪内氏・徳山氏の動き（慶応 4 年 / 1868）

赤報隊の通行

本来、赤報隊は、「東海道」鎮撫総督軍の先鋒となる予定でしたが、相良総三は「新政府に味方していない藩の多い中山道の方が重要」と判断します。そして、「東山道」鎮撫総督軍の先鋒となることを進言した上で、慶応 4 年 (1868)1 月 23 日に鵜沼に到着、宿泊しました。

しかし、新政府からの命令は、「東海道軍に参加するように」とのものでした。綾小路らは命令に従い、鵜沼から南の東海道方面に向かいましたが、相良は納得せず、本隊から離れて単独で東へ向かいます。結果、下諏訪で追いついた東山道鎮撫総督軍によって捕らえられ、処刑されました。年貢半減を掲げる赤報隊は、資金調達が必要な新政府にとって不都合な存在となったためであると言われています。



赤報隊　相良総三一行の中山道通行経路

▼ 薩摩藩邸焼き討ち錦絵（下諏訪町蔵）

倒幕派の浪士たちが集まっていた薩摩藩邸が襲撃される場面です。相良総三も潜伏して活動しており、船で脱出後、赤報隊を結成することになります。

赤報隊は、相良総三らによって組織された、脱藩士や豪農などを隊員とした部隊です。綾小路俊実、油野井公寿らを擁立し、新政府軍の先鋒となり、民衆の支持を得るために新政府による年貢半減を宣伝しつつ中山道を進みましたが、偽官軍として処断されました。

◀ 赤報隊印鑑　鵜沼宿本陣桜井家文書

印鑑とは、押印された文書が本物であるという証明のため、前もって書状の送付先に届けておく印影のことです。「鎮」の印が押してあり、「鎮撫総督」の意味であると思われます。赤報隊の印鑑は本史料が唯一です。

幕末の高札

高札とは、江戸時代、幕府・藩が法令を板札に墨書して町・村の高札場に掲示したものです。

内容は江戸時代を通じて、寛文元年（1661）に発せられた公儀五高札（忠孝・キリシタン禁教・毒薬禁止・公定駄賃・放火禁止）が基本であり、各務原の村々でもこれらのうちいくつかが掲げられていました。

戊辰戦争の最中、明治新政府は自分たちが「正義の官軍」であることを、全国・全身分の人々にアピールする必要がありました。その周知のため、江戸幕府の法律を知らしめるための手段であった高札が採用され、村々に配布されました。「新政府の高札が掲げられている地域は、新政府に従っている」というように、混乱した幕末の情勢下で敵味方を見分けるためにも重要なものでした。

▼慶喜追討札（三井村）慶応４年(1868)正月

明治新政府による、徳川慶喜の追討を武士宛に訴えた高札です。「徳川慶喜は大政奉還を行ったにもかかわらず、1月3日の鳥羽伏見の戦いを引き起こした『大逆無道』の者である、朝廷の味方になるものは歓迎するが、敵対するものは朝敵である」と訴えています。

▼農商布告（東島村）慶応４年(1868)正月

東山道鎮撫総督府による、農民・商人宛の高札です。「徳川支配地であった天領だけでなく、どの藩の領地の人でも、圧政に苦しめられている人々は訴え出なさい、会議によって公平に対応します」と、安心して家業に励むように訴えています。

▼東山道鎮撫総督府執事高札　慶応４年(1868)正月

東山道鎮撫総督府から、東山道（中山道）沿いの村々に出された高札です。「最近滋野井や綾小路の家来を名乗って米や金を借りたり、人足に賃金を払わない者がいるが、それは賊徒である。捉えて差し出すか、抵抗すれば討ちとってもよい」と、赤報隊を賊徒であると認定しています。

◀東島村絵図　慶応４年(1868)　堀部家文書

蘇原の東島村を描いた地図です。高札場は、幕府の法律を多くの人に知らしめるため、曲がり角や村の中心地、街道沿い等、目立つところに設置されました。また、権力の象徴として、屋根・石垣・柵を備えた立派な屋形が組まれました。

鵜沼宿高札場（復元）

■五榜の掲示

五榜の掲示は、新政府が慶応４年（1868）３月に民衆へ基本方針を示した５枚の高札です。幕府の政策を継承しており、新政府に対する過度な「世直し」的な期待を抑制する狙いもありました。

第一札　五倫札

道徳の基本である五倫（君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信）を遵守すること、殺人、放火、強盗の禁止

第四札　外国交際札

攘夷運動をふまえ、国際法を尊重し、外国人へ危害を加えることの禁止

第二札　徒党札

集団になって訴えを起こす「強訴」、他の村と示し合わせて村から逃走する「逃散」の禁止

第五札　脱国札

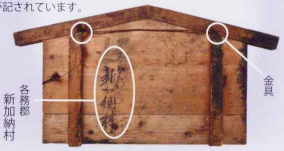
浪人や脱藩者を危険視し、武士、民衆が本国を離れることの禁止

第三札　切支丹札

キリスト教その他政府にとって危険な宗教は、これまで通りの禁止

■高札の裏側

高札を高札場に取り付ける際、釘で直接打ち付けるのではなく、金具に紐をひっかけ、取り外しできる形で掲示されました。火災が発生した際、幕府の命令である高札は、取り外して持って逃げるよう指示されていたためです。また裏側には、掲示されていた村の名前が記されています。



■田宮如雲と五榜の掲示

田宮如雲（1808～1871）は、幕末の尾張藩士です。藩政改革を行い、戊辰戦争では新政府方として尾張藩兵を率いて活躍しました。鵜沼の大安寺池および用水路を整備した人物として知られています。

その如雲は、高札を非常に重要視していました。「高札は天子様（天皇）からの命令であり、それを人々に守らせることが知事様（尾張徳川家）の仕事である。高札に書いてあることを守りなさい」と通達しています。

■高札の品質

各務原に残されている幕末の高札には、薄いものと分厚いものがあります。新政府から慶応４年(1868)１月10日から掲示された「慶喜追討札」や「農商布告」は、１月３日の鳥羽伏見の戦いから日が浅く、緊急で新政府から配布されたものです。そのため板は７ミリと薄く、誤字脱字も多くみられます。

対して３月15日から掲示された「五榜の掲示」は、正式な手続きを踏んで領主お抱えの職人によって作成されたものですので、厚さ３センチ以上の上質な板に立派な屋根付きとなっています。

高札の傷み（「慶喜追討札」）▶

■ 刀（個人蔵）

幕末の坪内宗家当主、坪内保之が作らせたと思われる、運寿是一作の大小揃です。刀は身幅広く、やや長寸で重ね厚く、丁子乱れ（小さなU字が連続して並ぶ刃文）の作柄です。一方脇差は互の目乱れ（半円や山形の突起が互い違いに連なる刃紋）で、大小の作風に変化をつけています。

是一は江戸の刀工で、相州伝と備前伝の技法の合わさった「相伝備前」を得意としています。安永年間（1772～ 1781）以降に作られた「新新刀」と呼ばれる刀の中でも卓越した刀工の一人で、数多くの作品が重要刀剣に指定されています。是一の大小揃は珍しく、銘に米沢藩のお抱え研師、玉木宗七郎が研いだことが記されているのも資料的に貴重です。

また拵（刀身を入れる鞘、柄、鐔の総称）は、米沢上杉家のお抱え金工である横谷宗寿の作です。登城用の正式大小と称される拵です。

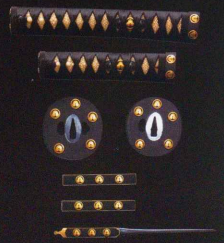
〈脇差〉
銘：石堂運寿是一精錬造之
安政二年乙卯歳二月日
於江府米沢住玉木宗七郎研之

〈刀〉
銘：石堂運寿是一精錬造之
於江府米沢住玉木宗七郎研之
安政二年乙卯歳二月日

銘にある「安政２年(1855)」とは幕末の坪内宗家当主、保之が「駿府城代」を務めている時期です。駿府城代とは、駿府城内の警備や修理を執り行う役職です。駿府は、江戸と上方の中間にあるため非常に重要視され、与力 10 人、同心 50 人の部下を従える重役でした。

拵には、どこから見てもわかるほどに坪内氏の家紋である「丸の内洲浜紋」があしらわれています。保之は、安政４年（1857）に御側衆、元治元年（1864）には御側御用取次に出世します。将軍の名代として、老中たちが頭を下げるほどの役職です。権力をもった保之の腰には、この立派な刀が差してありました。

坪内家
家紋「丸の内洲浜紋」



企画展「幕末の各務原」展示解説
編集　各務原市歴史民俗資料館　　発行日　平成 30 年 11 月 17 日　　※この事業は「とうしん地域振興協力基金」の助成を受けています。